

# 「教職概論」授業の取り組みとその課題

## —スポーツ健康科学部における教員養成のあり方を求めて—

右高和生<sup>\*1</sup>・村松常司<sup>\*2</sup>・小田佳子<sup>\*3</sup>

### はじめに

近年、「高校生の居眠り・日本最多」、「受け身の授業・つまらない」のみだして、日本の高校生の勉強が「一夜漬け」型であり、授業と宿題以外の勉強はしないという高校生が米国、中国、韓国と比較して最も多いという報告がなされた<sup>1)</sup>。その記事からは「できるだけ自分で考えようとする」は、米国や中国の半分の数値であり、「勉強したものを実際に応用してみる」の数値も最低であったと報告されている<sup>2)</sup>。

この課題は、日本の社会構造や時代の変化とともに日本の教育課題として取り上げられてきたことでもある<sup>3)</sup>。「新学習指導要領」<sup>4)</sup>の改訂にあたり、「教育の質の改革」として、「主体的、対話的、深い学び」のテーマを掲げて、教育課題に対処しようとしていることが窺える。

この課題の本質は、「学びの確かさ」であり、「学びの実感」<sup>5)</sup>である。「学び」は「人としての生き方」や「真理」に結びつくことが問われている。それは教える側と教えられる側の関係という側面だけでなく、ともに「探し求める」姿勢の構築こそが、次の「学び」に繋げていくものであると考えている。しかし、この課題は高校だけではなく、大学にも問われるものであることは言うまでもない。そこで「大学生の学び」とは何なのか、を考え直し、「学びの確かさ」を追究しようと考えた。

学校教育法第9章<sup>6)</sup>では、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」「2 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」と規定されている。

これを受け、本学は「人材養成の目的」として、「勤勉誠実の信念と共生（ともいき）の理念に基づく人間力の向上を核として、幅広い職業人の養成を目的」<sup>7)</sup>としている。

スポーツ健康科学部<sup>7)</sup>では、「健康社会の構築に貢献できる保健体育教諭、スポーツ指導者、健康づくりリーダーなど、様々な分野での可能性をもった人材の養成を目的とする」とし、1年次でのカリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）では、「教育原理」「教職概論」などの「教職に関する科目」とともに、「スポーツ方法学実習（陸上）」「スポーツ方法学実習（バスケットボール）などの体育実技や「スポーツ心理学」など、「教科に関する科目」を開講している。これらを通して、保健体育教諭として必要な幅広い教養を修得し、教育を取り巻く今日的諸問題に対応できる基礎的な知識を体系的に身につける、としている。

これを受けて、「教職概論」の授業においては、「確かな学力や人間力を育む授業とは、どのような授業なのか」を学生と一体になって模索すべきであると考えてきた。そして、この大学1年生での「教職概論」の学びが、保健体育教諭としての幅広い教養と実践的な知識を身につけた「力量のある教師」を育てることに繋がると考えた。

本稿では、平成28年度の「教職概論」における授業の取り組みを概観する。

<sup>\*1</sup> 東海学園大学客員教授、<sup>\*2</sup> 東海学園大学スポーツ健康科学部教授・学部長

<sup>\*3</sup> 東海学園大学スポーツ健康科学部准教授

## 1. 本学部における「教職概論」の位置づけ

「教職概論」は「教職に関する科目」であり、本学では、1年生後期に開講される。平成28年度では、スポーツ健康科学部（経営学部の約12名を含む）の1年次生146名（57%）が受講している。スポーツ健康科学部のスポーツ教育コースでは、主として中学校・高等学校保健体育教諭を養成するコースの科目として実施される。1年生前期に「教育原理」を履修し、後期に「教職概論」を教職学習の基礎科目として設定されている。本学部での「教職概論」の位置づけ<sup>8)</sup>と目標は次のとおりである。

### (1) 「教職概論」の位置づけ

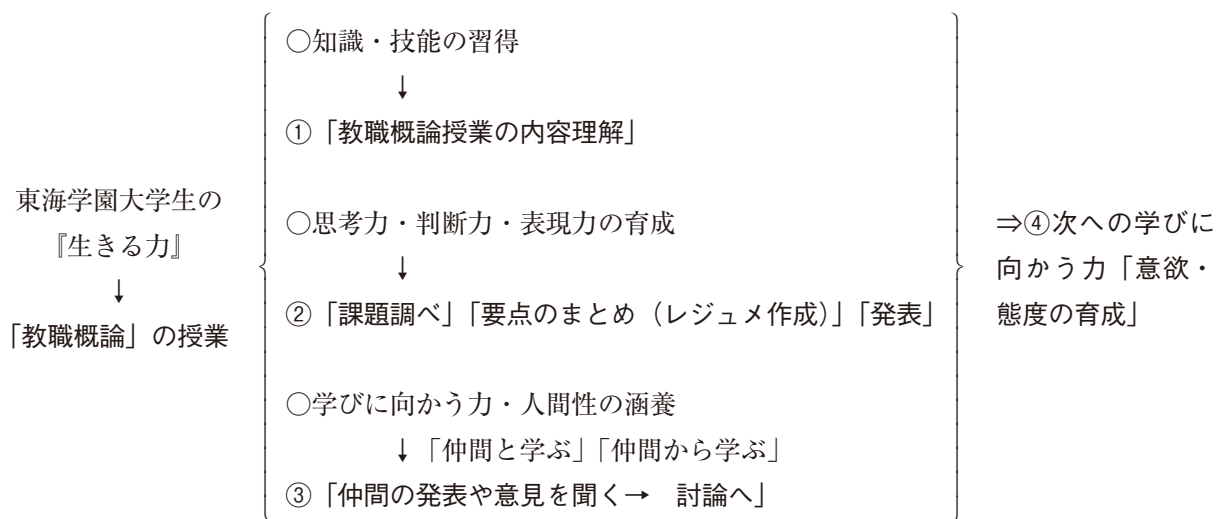
- ① 本学部、スポーツ教育コース、中学校・高等学校教員養成カリキュラムの教職入門科目であり、教育現場を幅広く、実践的に学ばせる。
- ② 本学部の教員養成カリキュラムの内容を正しく理解させ、自己の進路について深く考えさせる。
- ③ 教育の目的、教職、学校教育についての基礎的知識を理解し、習得させる。

### (2) 「教職概論」の目標

上記位置づけをもとに、目標を次の2点とした。

- ① 教職への意欲を持ち、その意義や教師の役割、職務内容等を論理的に解説や説明をすることができる。
- ② 教育者に求められる資質・能力を身につけるため、自ら調べ、他と学び、教職のあり方を追求することができる。

そこで「教職概論」授業の課題達成目標を①～④と設定し、授業実践を試みた。



## 2. 「教職概論」授業の実際－「確かな学び」を求めて－

平成28年度では、経営学部1年生は10名、2年生2名、スポーツ健康科学部1年生146名、合計158名が「教職概論」を受講した。これは前述したように、同学部在籍数の57%に当たる。

スポーツ健康科学部について言えば、入学時より3つのコース（①スポーツ教育コース ②スポーツコーチコース ③健康トレーナーコース）それぞれへの志望をもって入学している学生が比較的にも言えるが、教職志望といいながらも曖昧な気持ちでいる学生も多いのが現状である。

これらの状況を踏まえ、上記目標①～④の達成に向けて授業実践を行い、「教職概論の授業のあり方」

を模索しようと考えた。それは目指す「学びの確かさ」であり『東海学園大学生の生きる力』<sup>9)</sup>は「今後、教育現場に生き、勉強と研究を続ける教師の育成」のための学びを確かなものにするものであると考えた。以下にその内容を示す。

(1) 第1時限目に「教職概論」の「授業の進め方と約束ごと」の共通理解を図る

→ 146名の学生が「教職概論」授業に意欲と安心感をもって勉学に励もうとする

受講する146名は、第3時限目に96名、第4時限目に50名のクラス編成であるが、そのすべての学生が小学校や中学校、高校でやってきた筈の、身近で具体的な約束ごとを教師と一緒に再確認することは、大学教育では見逃されがちであるが、筆者らは教育の系統性、教育目標の達成のために重要であると考えている。集団がある目標を達成しようとする時には、まず一番にルールや方法、マナーをみんなが共通理解をすることが最も大切であり、基本であると考えている。本授業においては「教職を学校現場として具体的に捉えさせる」ことができるし、より実践的な「教職への意欲」に結びつくものになると考えた。さらに「教職概論」の学びの目的や内容、その方法を理解することで、「自らの学び」へと繋げ、意欲を持たせる「確かな学び」への第一歩であることを知らせたいと考えた。以下に内容を示す。

「教職概論」第1時限目の内容

- 1 「教職概論」の学び — その約束と確認事項、配慮事項 —
  - (1) 授業開始時刻と終了時刻の厳守「時間を守る」
  - (2) 授業の約束、「うそをつかない」
  - (3) 学生の一つ一つの自主的な報告を尊重
  - (4) 授業内容に必要な「会話」や「相談」「挙手」「自主的な発表」の推奨  
「静かな授業」を脱却し「学びの本質」へ → 「友から学ぶ、友と学ぶ」  
学ぶ姿勢と態度の育成
- 2 「教職概論」学習内容の確認（別紙）
- 3 チーム編成（3限目96名→14班に、4限目50名→14班に）
- 4 「個人アンケート」実施  
146名一人ひとりの理解と実態に即した対応と指導のために実施

(2) 「教職概論」授業内容の「テーマ（1～14項目）」<sup>10)</sup>と授業の構成について確認をする

→ 「学びあう教職概論」として、各自の調べと要点を発表することで自らの「学びの意味」を実感することができる

この授業は教職を目指す学生のための授業である。このことは必然的に、この授業自体が学ぶ者にとってのある種の「モデルの授業」となっていることを意味している。その意味で教える側の覚悟も必要であるし、何よりもしっかりと計画と準備が必要となる。基本に戻れば、「授業は、学ぶ者と一緒に授業を作り上げていかねばならない」ということになる。そこで、授業の第1時限目に、以下のように受講する96名と50名の各クラスの学生と協議をし、毎時間の学習のしかたや方法といった授業の進め方の確認をした。それが次の内容である。

目指す授業 「学びあう教職概論」

- 1 各学生が自分で担当課題を読み、調べに取り組む（自分で調べ、理解する）
- 2 一つのテーマを、チーム内で手分けし、協力し合って課題をまとめる  
→ 「レジュメ」の作成（協力し合って、要点をまとめる）
- 3 調べた内容を自分のことばで「発表する」（解説や説明ができる）
- 4 発表された内容を全員で考え、深め、追求する姿勢を育てる（全体で協議し、深める）

また、この目指す授業の確認は、以後の授業の中でもより発展的に捉え、常に学ぶ側からの目線を意識し、その都度「学び方」「調べ方」「まとめ方」「発表のしかた」「メモのとり方」「声と表現のしかた」「発表姿勢や態度」「マイクの使い方」等を取り上げ、その意味や根拠を一緒に考えることにした。「授業を一緒に作っていく」こと、そして「ステップアップしていく学び」を目指して取り組むという意識づけである。それが「知識・技能を修得」し、「思考力、判断力、表現力を育成」し、「学びに向かう力を涵養」する、その学びの全てが「人間性の涵養」に結びつく試みであると考えた。

(3) 毎時具体的な資料（新聞）により、今の「教育現場」の状況を知らせる

- 自らが「専門職としての教師」を目指していることの実感を持たせ、実践的な知識の習得と「求められる教師像」をいつも意識させることができる

「教職概論」の学びには、基礎・基本となる教育原理や理論の学びとともに、教育現場での実践力の学びが必要である。原理や理論は実践力と結びついて、初めて教育現場に生きてくるからである。

そこで、今の教育現場の現状をしっかりと捉えさせ、専門的で具体的な知識を習得させようと新聞報道されている記事を毎時準備、配布し、一緒に考え、学ぶ資料とした。社会の変化そして情報社会といわれる中で、本学の学生たちにとってもなかなか新聞を読む機会が少なくなっており、毎時授業のはじめに取り上げた記事は、知識として、また今後の自分のあり方を考える大きな材料になると考えた。

(4) 発表一週間前に「チーム全員が集まり」①チーム全体のテーマの確認、②各自が調べる課題の確認

- ③要点のまとめ方（レジュメの作り方）、④発表の仕方等についての「打ち合わせ会」を設定した

- 取り組み内容や方法を理解すると、仲間と協力し、自信を持って意欲的に取り組む姿勢を養うことができる

1年生にとって、課題についての「調べ（理解する）」「要点のまとめ（レジュメ作成）」「発表」は、大きな負担となるもので、その質問に来る学生も多い。そのため、自身の発表一週間前にはチーム全員が集まり、筆者らも加わり一緒に内容の確認とその方法についての「打ち合わせ会」を行った。それぞれの学生の「自由な取り組みや学びを尊重」しながら、納得と自信を持たせる場を設定した。このことが、次の「自身の評価」「チームの評価」へと繋がるものであり、真剣であるが自由な会話や笑顔での打ち合わせができるように配慮した。それぞれ不安はあるが、それでも納得や自信をもって自由に勉強できるように考えた。

この「打ち合わせ会」の設定は、次の目標を達成することにある。

- ① 「チームと自分の課題」が明確になり、目的を持って課題に取り組むことができる
- ② 「学び」を仲間と共有し、チームの一員として尽くそうとする姿勢を養うことができる
- ③ 「学びの姿勢」を全体に見せることによって、後に続く学生は「学びのモデル」を具体的に知ることができ、励みや意欲を得る機会となる

## (5) 「調べ」、「要点のまとめ（レジュメ作成）」、「発表」、それぞれの評価を丁寧に行う

→ 「さらなる学び」への意欲づけであり、「ステップアップしていく学び」に繋ぐことができる

学生は、自分の担当した課題について調べ、その後「まとめ（レジュメの作成）」をし、当日の発表に至る。この「発表」に至るまでの「学びと取り組み」は、ほとんどの学生が緊張して取り組む。学生の能力には、得意、不得意等はあるが、本学部の学生のみじめに課題に取り組む姿こそ大切にしなければならないと考えた。それは丁寧に「評価」をすることであり、具体的には毎時、次の3点について評価を行った。

- ① 一人ひとりの学生の「取り組み」に対する評価
- ② その一つひとつの取り組みの「内容」に対する評価
- ③ その「チームの全員」に対する評価

これらの評価は、その時と場の評価であるが、そこに至るまでの学生の取り組みの姿を捉えた上で適切な評価のこぼとなるように配慮した。またその「評価」は、「その学生を次にステップアップさせ」、「次の学びへの意欲を持つ」ものとして特に慎重さと丁寧さに留意した。この授業を通して、一人ひとりの学生は目前で「緊張して勉強をしているその仲間の姿」を学び、「自らの意欲へ」と繋げるものである。それは一人だけの学びでなく、「みんなで学ぶ」「友と学ぶ」、「友から学ぶ」姿勢を育てる意味でも大きな意味を持つ。その意味で「評価」と「人の意欲」との関連性は極めて大きいと考えた。

## (6) 「教職概論」授業を行う上での配慮事項

→ 学生一人ひとりと指導者が共に「教職への道を探し求める」授業へ

前述したように、「教職概論」の学びはその場だけの「知識・技能の習得」や方法論であってはならないと考えている。この授業によって自らの学びが深いものとなること、また、それはやがて実践的な姿勢や態度となっていく学びでなければならない。その授業実践に当たっては、学生の学びの環境や状況から、筆者らが留意した事項は次の諸点である。

- ① 「新聞資料」の準備と配布のため、授業の10分前に入室し、整えていること。
- ② 「レジュメ」の印刷は、費用を要するため、教師が毎回印刷をする。  
そのためチーム代表者は発表前日までにレジュメ原稿を提出すること。
- ③ 課題発表者7～8名は、「レジュメ」をもとに、責任を持って「自分のことばで解説、説明」をし、全員からの質問を受け、自分たちのわかる範囲内で回答し、意見の交換ができる場面の設定をするように、毎時その指導を重ねること。
- ④ 各チームと個人の発表は一人約5～8分とし、教師は必ず要点項目について補足解説をし、理解を深める工夫をすること。
- ⑤ 課題と内容確認のために「テキスト」を使用する。今後、教職を目指す者としての学習と「大学での学びの充実」のために役立てようと入手を薦めた。
- ⑥ 日本の伝統・文化や慣習を的確に捉え、その時々々の時節に合った日本の知識や知恵を「教職概論」の中の内容として設定し紹介する。

### 3. 結果

この授業実践の結果は、それぞれの目標に沿って、①授業への学生の出席率、②本学が実施した受講生対象「授業アンケート」調査結果、③発表の評価記録、④授業後に提出させたレポートから検証した。

(1) 「課題」に対して主体的、意欲的に取り組むことができたか。

次の図1-1と図1-2は、平成28年度「教職概論」出席率である。3限の欠席の平均は、3.3名、4限の欠席の平均は1.5名であった。その時の体調や諸事情により出欠席は変化する。ベネッセ教育研究所の「大学生の学習・生活実態調査報告書」<sup>11)</sup>によれば、1年生の全国平均9割以上出席している割合は76%と発表されている。これと比較すると、本学の「教職概論」授業への学生の出席率は3限、4限ともに97%台であり、高い割合となっている。また同報告書<sup>11)</sup>の中で、学生の出席率について「こうした学生の目的意識、学習意欲や学習に対する姿勢も出席状況に影響があると考えられる」と報告している。このことから、「教職概論」の授業に意欲的に参加してきた学生が多かったと捉えることができる。

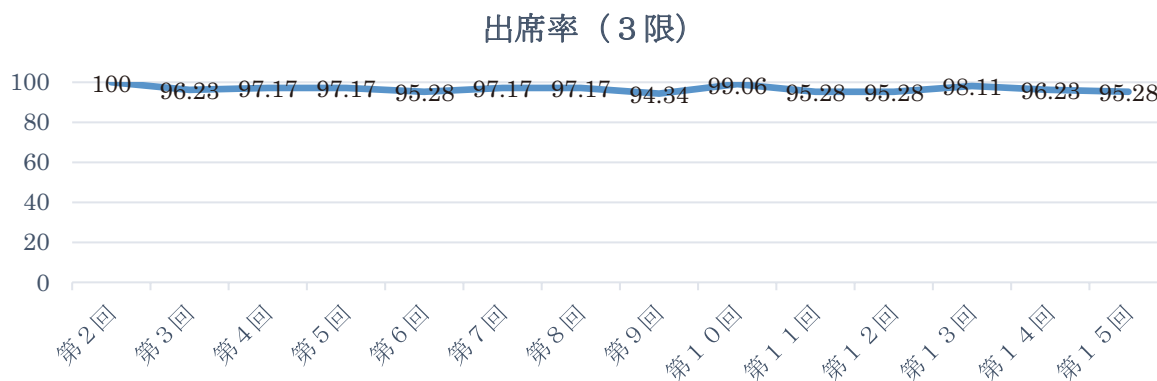


図1-1（受講学生数106名）

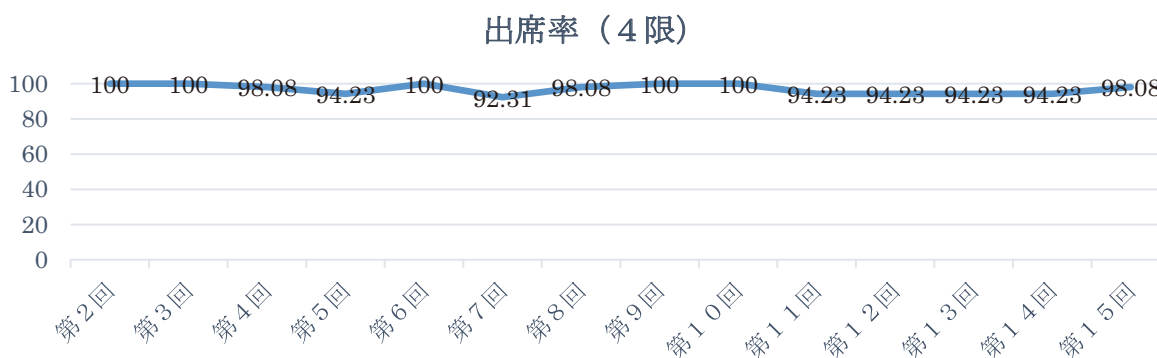


図1-2（受講学生数52名）

次に、本学が実施した「2016年秋 授業アンケート」<sup>12)</sup>から、次のような結果を得た。

表1 「事前にシラバスを読み、授業に関する情報を得たか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない (3点)	ややそう思わ ない (2点)	全くそう思わ ない (1点)	(評価平均値)
3限96名	15	20	44	8	9	3.25
4限50名	8	19	15	3	5	3.44

表2 「この授業に積極的に取り組んだか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない (3点)	ややそう思わ ない (2点)	全くそう思わ ない (1点)	(評価平均値)
3限91名	24	33	27	6	1	3.80
4限42名	12	21	9	0	0	4.07

表1から、「シラバスから教職概論授業の情報を得た」人数は3限で96名中35人(37%)、4限で50名中27名(54%)、逆に「得たとは思わない」や「どちらともいえない」は3限合計61名(64%)、4限23名(46%)と多い。授業を受ける前の「教職概論」への興味や関心、意欲の高い数値は出ていない。

次に、表2では、その後、授業を受けてみて(授業の終盤になって)の調査「この授業に積極的に取り組んだか」では、「そう思う、ややそう思う」が3限合計57名(63%)、4限合計33名(79%)の結果となっている。しかし、「どちらともいえない」が27名(30%)、「全くそう思わない」「ややそう思わない」が3限7名(8%)で、3限平均3.80となっている。

## (2) 学習内容の理解度について

次に、学習内容の理解度について、学内調査の「2016年秋 授業アンケート」<sup>12)</sup>から、表3、表4のような結果が示された。

表3 「シラバスに示されている到達目標を達成できたか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない(3点)	ややそう思わ ない(2点)	全くそう思わ ない(1点)	(評価平均値)
3限95名	16	38	38	3	0	3.71
4限50名	11	27	12	0	0	3.98

表4 「この授業内容はよく理解できたか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない(3点)	ややそう思わ ない(2点)	全くそう思わ ない(1点)	(評価平均値)
3限95名	28	38	27	2	0	3.97
4限50名	16	26	8	0	0	4.16

この調査から、表3「シラバスの到達目標の達成度」について3限の「達成できたと思う」は「そう思う」「ややそう思う」合わせて54名(56%)、4限では38名(76%)と回答している。さらに、「どちらともいえない」では、3限38名(40%)、4限では12名(24%)となっており、シラバスの目標到達には不十分だと捉えた方がよい結果が示されている。

表4「授業内容の理解度」について、「そう思う」と「ややそう思う」合わせて3限66名(69%)、4限42名(84%)となっており、理解度が高い状況が示されている。しかし「どちらともいえない」と回答している学生が、3限27名(28%)、4限8名(16%)となっており、かなり多い数値である。「教職概論」の授業の内容は理解できている学生と、確信をもって言い切れない1年生教職希望の学生のそのままの姿の結果であるとも言える。

## (3) 「要点のまとめ(レジュメ作り)」と「発表力」について

### ア 「要点のまとめ(レジュメ作り)」

レジュメ作成のポイントを①自分で理解してまとめられているか、②大切な要点が押さえられ、わかりやすいか、③読む、見る人の立場を考え工夫がされているか、の3点に絞って指導した。さらに各チーム内で「レジュメ作り」の打ち合わせも行って取り組んできたので、課題に対する要点だけはしっかり押さえられたものとなった。1年生後期の授業でもあり、ほとんどの学生が「初めてレジュメを作った」という状況に始まり『苦労をしながらも出来上がったレジュメを手にとって見たときに学びの実感を得た』と話した学生もいた。一人ひとりの学生にとって苦労の結晶の一つが「レジュメ」作りで

あったと言える。

イ 「発表力」の評価について（毎時間3限では7～8名、4限では2～3名が発表）

毎時、①「レジュメ」を配布し、②チームとして教壇に立ち、各自の「課題」をマイクを使って発表、③質問を受けて回答し、さらに討論を試みる、④評価を受ける、を授業の内容として実施した。

学生にとって、この「課題の発表」は大きな負担になったようである。それぞれの性格的な特徴に左右されやすいこともあるが、「自分のことばで説明や解説をすることが一番難しかった」と多くの学生が話してくれた。「自分のことばで表現」の難しさについては、以下のようにまとめることができる。

- ① 内容の全体が理解できていないと「自分のことば」で表現ができない
- ② 自分でまとめた「レジュメ」が文章書きであると、「読む発表」になりやすい
- ③ 複数で発表する場合、前の発表者の「発表のしかた」に合わせる傾向がある

各学生が「自分に与えられた課題」として真剣に向き合い、緊張して「発表」に挑戦した。学生のすべてを前向きに捉え、「要点や説明のわかりやすさ」「内容の深さ」「例や応用力のある説明」等だけを求めず、「声の質」「声の大きさ」「姿勢」「ことばのわかりやすさ」「ことばの丁寧さ」「表現の優しさ」「発表に向けた服装」等で本人の「発表の良さ」を評価する。一方で、発表で大切な「何を言おうとしているのか」や「ことばの聞き取りにくさ」や「レジュメを読む」発表に対しては「今後に向けて・・・するとさらによい発表になる」等の評価につとめた。最後には、チーム全体の評価をすることによって、聞いている学生から毎回「拍手」の評価がなされ、発表者と聞く側との一体感は「授業」から得た感動であった。以下の図2-1、図2-2は、「発表の評価」の記録からまとめた「発表力の評価の集計」グラフである。

このグラフから、当初から目標にして取り組んできた「自分でまとめたレジュメで、何を言おうとしたのか」をきちんと捉えて全体に説明や解説ができた学生も多い。反面、評価がB上、B、B下は「レジュメを読んで発表」「大切な要点がわかりやすいとはいえない」説明であって、その両者に分かれていることを示している。こうした学習経験をすることで「自分のことばで説明ができる」が上達すると考える。

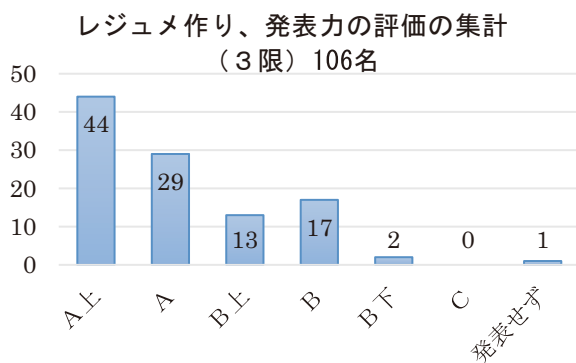


図2-1

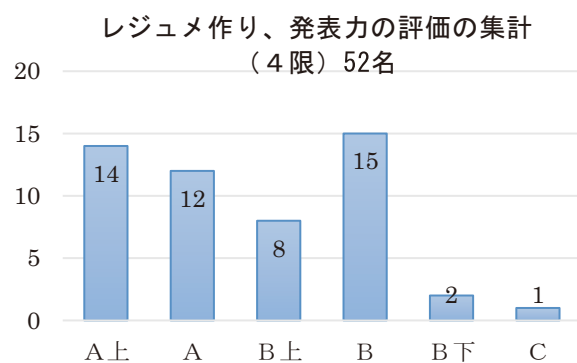


図2-2

ウ 「仲間の発表や意見を聞く（仲間と学ぶ）」について

「教職概論」授業の大きな柱の一つにしたのが「友と学ぶ」「友から学ぶ」態度の育成であった。それは、「今後、教師として、人間として生きていく」ための基礎であり、基本となる部分であるからである。事後のレポートで多かった内容は表5のとおりである。



表5 事後の「レポート」で多かった内容

		3 限94名中	4 限50名中
1	教師になることの実感と厳しさを実感	21名	9名
2	友だちと協力しての発表は今後に生かせる	16名	14名
3	友だちの発表で発見や気づきが多くあった	7名	11名
4	発表で「人に伝える」ことの難しさを知った	13名 (計57)	5名 (計39)

その他の内容では、「積極的に参画できた」3 限9名、4 限2名、「褒めてもらえて嬉しかった」3 限1名、4 限2名、また「人として成長できた」等が述べられていた。

#### (4)「教職概論」の学びの後の「興味・関心・態度」と意欲について

「教職概論」の授業について、学内調査の「2016年秋 授業アンケート」<sup>12)</sup> から、表6、表7のような結果が示された。

表6「授業内容への興味・関心が増したか」について、「そう思う」と「ややそう思う」合わせて3 限61名(65%)、4 限40名(80%)となっており、3 限と4 限での差が出ている。また「どちらともいえない」「ややそう思わない」と回答している学生が、3 限33名(35%)、4 限10名(20%)となっており、しっかり受け止める必要がある。

次に表7「自分で調べ、考える姿勢が身についたか」について、「そう思う」と「ややそう思う」合わせて3 限62名(65%)、4 限34名(69%)となっている。これに対して「どちらともいえない」「ややそう思わない」が合わせて3 限33名(35%)、4 限15名(31%)で、3 割強の学生が「自分で調べたり、考える姿勢が身についたとは言えない」自信のなさを表現している。

表6 「授業内容への興味・関心が増したか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない(3点)	ややそう思わ ない(2点)	全くそう思わ ない(1点)	(評価平均値)
3 限94名	25	36	31	2	0	3.89
4 限50名	15	25	9	1	0	4.08

表7 「自分で調べ、考える姿勢が身についたか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない(3点)	ややそう思わ ない(2点)	全くそう思わ ない(1点)	(評価平均値)
3 限95名	30	32	31	2	0	3.95
4 限49名	17	17	13	2	0	4.00

「教職概論」授業を総合的に見ての満足度については、同学内調査の「2016年秋 授業アンケート」<sup>12)</sup> から、表8のような結果が示された。

表8 「授業は総合的に見て満足のものか」

人数 (値)	そう思う (5点)	ややそう思う (4点)	どちらともい えない(3点)	ややそう思わ ない(2点)	全くそう思わ ない(1点)	(評価平均値)
3 限95名	27	44	24	0	0	4.03
4 限50名	19	21	9	0	1	4.14

表 8、授業の満足度「そう思う」「ややそう思う」合わせて 3 限 71 名 (75%)、4 限 40 名 (80%) となっており、一緒に授業を作ってきた受講生からの励ましの声として受け止めたい。しかし「どちらともいえない」「ややそう思わない」と回答している学生が、3 限 24 名 (25%)、4 限 10 名 (20%) となっており、満足をしていない受講者が多くいることを示している。

梶田<sup>13)</sup>は、学校で用いる主要な 7 つの評価方法が、どの評価側面に適しているかについて分類し、「レポート法」は興味・関心、知識・理解、思考力論理力、態度、技能の全体を知る上で適しているとしている。これをもとに教職概論受講者全員に「教職概論からの学び」をテーマにし、A4 用紙 1 枚にまとめて提出させた。レポートの要点を整理しまとめることは難解な作業であったが、その結果は次のようになった。「授業を受ける前の教師像」と「授業を受けた後の教師像」の捉え方の変化（増えた内容と減少した内容）が、表 9、表 10 である。

表 9、表 10 より、教職概論授業実施後、教師志望数は減少した。授業開始前の 3 限受講希望者 106 名の「個人アンケート」結果では、「教師になりたい」は 91 名 (85.85%)、4 限希望者 51 名中 44 名 (86.27%) であった。これが、授業終了後のレポートでは、3 限 105 名中 71 名 (67.62%)、4 限 51 名中 32 名 (62.75%) と大きく減少した。その理由をレポートの中から「教師になることの責任の重さ」「教師の職務の厳しさを実感」（3 限では 21 名、4 限では 9 名）と述べている。

表 9 事前アンケートと事後レポートの内容比較：「増加した内容」※複数回答あり

	事前アンケートと事後の「レポート」からの変化	3 限 94 名	4 限 50 名
	いっそう教師になりたいと思った	71 名 (-18.2%)	32 名 (-23.5%)
	※「いじめのない」学校にし、教師になる	16 名	14 名
1	一人ひとりの生徒と向き合える教師（個性、長所を伸ばす）	44 名 (+18 名)	29 名 (+16 名)
2	生徒のことを第一に考え、責任感のある教師	26 名 (+23 名)	4 名 (+ 1 名)
3	生徒、保護者、先生方から信頼される教師	22 名 (+ 3 名)	12 名 (+ 0 名)
4	「人、教師として」生徒とともに学んでいける教師	9 名 (+ 8 名)	2 名 (+ 1 名)

表 10 事前アンケートと事後レポートの内容比較：「減少した内容」※複数回答あり

1	担当教科の技術を正しく教える。楽しさを伝える教師	17 名 (- 6 名)	6 名 (-10 名)
2	生徒の見本となり、目標とされる教師	8 名 (- 3 名)	3 名 (- 2 名)
3	生徒の将来の手助けができる教師	6 名 (- 5 名)	3 名 (- 2 名)
4	生徒との距離が近い教師（生徒に好かれる教師）	1 名 (-15 名)	0 名 (- 2 名)

## 4.課 題

今回の「教職概論」の授業を行った結果、いくつかの課題がみられた。以下に記す。

- (1) 結果の中の数値が示すとおり、「この授業に積極的に取り組んだか」の問いに「どちらともいえない」という回答者が 3 限と 4 限合わせて 36 名、「授業内容はよく理解できたか」の問いに「どちらともいえない」という回答者数計 35 名、「授業は総合的に見て満足のいくものか」の問いに「どちらともいえない」という回答者数 33 名。3 割から 4 割の学生が「どちらともいえない」と答えている。「学生と一緒に授業を作る」という目標は、学生の一人ひとりの実態を捉えたものとなっていない部分が多い結果である。均等なクラス編成も必要である。受講者が納得する授業づくりができれば、「どちらともいえない」の回答は少なくなると思われる。
- (2) 「調べる（理解する）」や「要点をまとめる（レジュメ作り）」には、学生の個人差をよく考え、個人

的に不明な点についての調べ方や、まとめと発表の仕方等を教え合う場の設定が必要と思われる。基礎となる内容を理解させることが「発表への自信」となり、その後の「意欲づけ」に繋がると思われる。

- (3) 発表後の評価については、単なる理解度や発表内容の評価をするだけでなく、「評価される側が、評価のことば（内容）から学ぶことのできる評価」とならなければ、評価は生きたものにはならないと思われる。
- (4) 紙面の「レジュメ作り」にこだわって授業を構成したが、効率的な授業のためにもパワーポイント等による発表の授業を進め、検証する必要がある。
- (5) 毎時の「課題の発表と評価」、そして教師側の「内容についての解説や補充」のバランスを「学ぶ側からの目線」で再考する必要がある。
- (6) 「教職概論」の授業は、他の教職科目や教養科目と関連しながら行われる授業である。その意味で、今後できる限りの連携をとりながら授業実践することが望ましい。
- (7) 授業を終えて、①「体罰は絶対に許されない行為である」こと、②「いじめは絶対に許されない」という意味が、多くの学生の中で十分に理解できていない状況を感じている。幾度となく具体的な場面で話し合っても、「漠然としたダメなこと」として受け取っている感触がある。「絶対にいけない」ところまでの指導が不十分である。
- (8) 最後に、それぞれの課題の発表を全員のテーマとして、議論や討論をするところまで導くことができなかった。質問や意見を出す場面は何回もみられた。しかしそこから進める指導ができなかった。議論によって多くの違いを知り、多くの知識を得る。それが「より深い学び」となる。今後の課題である。

## 5.まとめ

この授業の取り組みから、「教職概論」の知識としての内容理解については、多くの学生が達成できたと言える。また授業に対しても意欲的に参加してきた学生が約70%である一方、「どちらともいえないと答える学生が多くいることがわかり、今後の課題も明確化できた。

本授業の実践を通して言えることは、「授業は教える側と教えられる側の関係の信頼感」が基本であり、「大学での学び」はそこに「共に探し求める姿勢」の構築があってこそ次に繋がる学びの意欲を育てることになる、ということであろう。

「教職概論」の授業の目標を「確かな学び」とし、①授業内容の理解力、②思考力、判断力、表現力、③人間性の涵養、④次への学びに向かう意欲、を確かなものにしようとする。授業の実践から、①毎時、学生と一緒に授業を作ってきたこと、②この「教職概論」の授業を通して教職という「専門職としての教師の道」を探してきたこと、の二つを柱にした。これは、今後東海学園大の学生たちの学習の力となり、教職への次のステージに向かって意欲を持ち、「確かな学び」を続けてくれるものと確信する。

以下は学生たちが「教職概論の学び」をテーマに提出したレポートに記したことばの一部である。これを報告して本稿のまとめとしたい。

- 「講義の内容は、教師としての専門的な勉強から、秋の七草などの生きる知恵まで幅広く学んだ」
- 「これまでの学びとは比べ物にならない程理解することができました」
- 「この授業からは、さまざまな教育方法を見たり聞いたり体験できて、初めて教師の大変さと教えることの楽しさを学ぶことができた」
- 「理想の教師像は、理想の人間像であると私は教職概論の授業を通して考えることができた」

- 「私たちは学び続けなければならないのだと教職概論から学ぶことができた」
- 「理解力」「要約力」「集中力」「自分の足りない部分が浮き彫りになった」
- 「この教職概論で、教師という職業に対して自分の意識やイメージを変えることができてよかった」
- 「この教職概論を学んで、改めて教師になるということは難しいと感じた」
- 「授業を受けて教師の厳しさを知ったが、知れば知るほど教職につきたいという思いが強くなった」

## 参考文献

- 1) 読売新聞 (2017) : 2017年 3月14日 (日刊)
- 2) 国立青少年教育振興機構 (2016) : 「日米中韓「勉強」意識調査, 4か国の高校生7854人を対象に2016年2月~11月調査
- 3) 文部科学省 (2017) : (3) 今後における教育の在り方の基本的な方向, 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (中央教育審議会 第一次答申)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/attach](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach) (2017年6月4日検索)
- 4) 文部科学省 (2017) : 学習指導要領, <https://www.mext.go.jp> (2017年6月4日検索)
- 5) 山口大学教育学部附属山口小学校 (2010) : 学びの実感  
<http://www.ymg-es.yamaguchi-u.ac.jp/03-06history/H22souron.pdf#search=%27> (2017年6月4日検索)
- 6) 文部科学省 : 学校教育法 <http://law.e-gov.go.jp/> (2017年6月4日検索)
- 7) 東海学園大学 (2017) : 履修の手引き (別冊) 三つのポリシー, 1, 21-24
- 8) 東海学園大学 (2017) : 履修の手引き, スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科, 33-40
- 9) 東海学園大学 (2016) : 履修の手引き, スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科, 35-42
- 10) 小島弘道, 北神正行, 水本徳明, 平井貴美代, 安藤知子 (2016) : 教師の条件-授業と学校をつくる力-, 学文社, 東京
- 11) ベネッセ教育研究所 (2012) : 第2回大学生の学習・生活実態調査報告書, 第3章「大学での学習」, 第1節「大学生の学習状況」1 授業への出席状況, 78-85, 5 大学教育に対する選好, 92-95, 第2節大学での学習成果 2 大学生活・授業での経験と学習の成果との関連, 108-110 <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3159> (2017年6月4日検索)
- 12) 東海学園大学 (2016) : 秋の授業アンケート
- 13) 梶田叡一 (1983) : 『教育評論』有斐閣双書  
[https://www.manabinoba.com/edu\\_watch/24311.htm](https://www.manabinoba.com/edu_watch/24311.htm) (2017年6月4日検索)